

「正義への叫び」

旧約聖書 アモス5章4節～13節

- 1、アモス書は激しい預言の言葉を語っています。5章は神の裁きの託宣です。今から二千八百年前、北イスラエル王国のヤラベヤム2世は、政治手腕のある人であり、戦争のない時代、国の内外は繁栄の空気が漂っていた。しかし、それは表面のこと。現実には不義不正を行う支配者の横暴は目に余るものでした。特に、宗教は繁栄を祈り祭りをを行う国家祭儀となっていました。「私はあなたがたの祭りを憎み、かつ卑しめる・・・あなた方の歌の騒がしい音を、私の前かた断て」(21)。本来イスラエルの祭りは、細かい規定がレヒ記(1-7章)にあるように、和解、贖罪、賠償、穀物、葡萄酒、随意的献げ物など神との関係での、悔い改め、感謝、祈願、執り成しが内容でした。しかし、その時代は宗教が変質して、生産性向上を祈る祭りが第一になって、自己拡張が祈りが為されていたのです。人々が動員されたベテル、ギルガル、ベエルシバ(5)の国の祭壇では、王室の楽隊が繰り出されて騒がしい音を出していました。批判をすれば白い目でみられます。「賢いものは沈黙する」。こういう時代に「祭り」に「否」をいうことは大変なことでした。
- 2、アモスは、テコアの牧者の一人でした。エルサレムから南に15キロの小家畜飼育以外には特に産業を持たない寒村の出身です。その彼が主(ヤハウェ)に召されて、弱者の抑圧の上に安住していた支配階級に民族の全面的絶滅を予言する言葉を語るのです。晴天の霹靂でした。本来祭りは、民族学でいう「ハレ」の日です。「ケ」の日常の労働との緊張関係にあります。イスラエルには「平穏であってひとかけらの乾いたパンがあるのは争いがあるのがあって食物のゆたかな家にまさる」(箴言)のように民族の共同の在り方の根底には、分かち合う日常というものがありました。日常の再創造としての祭りは大事ですが、それと切り離されて、貧しいものを踏付けたままの祭りは本来の祭りの精神を失っている。
- 3、祭りの根本は、4節「わたしを求めよ、そして生きよ」6節「主を求めよ、そして生きよ」。14節「善を求めよ、悪を求めぬ。そうすればあなたがたは生きることが出来る」。「わたし(主)を・・・」と一人一人の心の内に呼び掛け生き方の変革をうながし、「悪を求めぬ」という一般的呼び掛けを含めて祭りがあります。「我々が神を求めるに先立って、われわれを求める神がある」(リュティエー)。ここに祭りの本質がある。喧騒の中で、われわれはこの訴えを、果たして聴き得るであろうか。心を澄ませたい。
- 4、先週、私はキリスト教関係の雑誌から頼まれて1970年代の「万国博覧会反対闘争」に関して書きました。高度経済成長期、日本の企業はアジアに進出し、安い労働力を使って経済侵略を「万国博覧会」というお祭りで景気付けました。東京神学大学で激しい反対闘争が持たれました。「非正規8万5000人失職」(12月26日朝日夕刊)を見ると、根っこは万博につながっていると感じました。